

2020年12月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

吾が肩に一蹴り入れて蟻蛸逃ぐ	吉田多々詩
扇風機壊れてなほも首を振る	大石 高典
見事なる木通に棹があと少し	仁田 浩
日の射すや桐の実の鳴る午さがり	中島 冬子
蟻蛸の子跳ぶに目測を誤てり	羽鳥 正子
東天の雲の多さよ秋澄めり	中井 昭雄
出征の学徒の句集秋時雨	植田 清子
長身の盆僧かがみ入る座敷	真下 章子
宿を守る軒端軒端の貴船菊	河村 純子
虫の音を酒の肴に未だ寝ねず	朝田 玲子
燕帰る大河の橋の真上行き	古川 邑秋
音愉し青げらの打つ樵大樹	佐々木 成
湖に秋の日が画く波の綺羅	渋谷 啓子
虫の音やはうと息吐く仕舞風呂	谷口 文子
鶉とまたたびの実を奪ひ合ふ	鳥居 裕子
落日や鴉に揺るる里の秋	碓氷 芳雄
本日は晴天なりと震災日	長浜 利子

裏返り風を生み出す風知草	福 のり子
十一の吊橋渡り滝巡る	野木 正博
川いまだ台風濁り肥後平野	中村 順次
ねこじやらし供花に加へて風にはか	益子 桂子
片づけに宝出たると盆の家	松澤 博子
おかへりか話においで盆じやもの	坂 利美
ぼつりまたぼつりと話す秋灯下	大野 邦夫
澄む水の流れに揺るるかづら橋	小堀 恭子
一雨を待ちて大根蒔きにけり	森 幸子
秋晴れに夫と一日を田に過ごす	山口 容子
ひやひやとして薄布団かき寄する	山田ミチ子
灯下親し二つの眼鏡使ひ分け	山中ひでの
旅公告見かけぬ電車秋気澄む	齋藤 耐
新涼や風呂の温度を二度上げて	石原ゆき子
檻の鶉の横一列ぞ秋暑し	南田美恵子
セイレンの誘ひか台風来たる海	山中伊蘭子
東西の国を一つの地図や秋	三原真紀子
反戦歌途絶へし街や秋夕焼	牧田満知子
ピースてふその名の重き秋薔薇	長瀬 朋孝



秋鯖やはや撓りたる妻の竿

田中 勝

2020年11月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

陸にある千石船や雁渡し	宮澤 淑子
八万本の向日葵密に競ひ合ひ	中嶋 文子
刈られても刈られてもま芒なり	大石 高典
非常食買ひ足す日なり震災忌	羽鳥 正子
腹立つるなど妣の口癖虫時雨	酒井 富子
搾乳の始まる牧舎朝郭公	佐々木 成
悲しみを笑ふ吾れ在りちちろ鳴く	友永基美子
今朝秋の川に流れの戻りけり	古川 邑秋
氷片をグラスに浮かべ秋に入る	吉田多々詩
椰子の実と写れる父よ終戦日	鴻坂 佳子
銅の鍋すべて祖母より星月夜	川上 和昭
大梁に音しゆるしゆると青大将	益子 桂子
京都駅ゼロ番線の風が死す	山本 真也
逢ひたさに空見上ぐれば星流る	植田 清子
疎開児みな老境となり星月夜	加藤かず子
秋灯や基地の中なる母の墓	志多伯節子

原爆忌歪む砥石に刃先あて	立石 律子
遠隔会議失敗重ね秋立ちぬ	中井 昭雄
一念の写経の夏書納めけり	長瀬 朋孝
野に還る農地のふゆる稲田道	中野 梓
小ぶりとして旨さは負けぬ島バナナ	福地 義雄
湖に何か跳ねたる残暑かな	真下 章子
白鷺を呼び込むごとき稲穂波	山中ひでの
走る子に浜辺は秋の色となる	川内 麻美
太陽を背負ひ出でたる青蜥蜴	富沢 壽勇
羽化終へし蟬は萌黄のいろの武者	牧田満知子
下仁田葱植ゑ替ふる残暑かな	森川恵美子
地球儀へえいと向けたる扇風機	河村 純子
土地の言葉もどりにて浜の夏終る	仁田 浩
朝顔に潮風しるき日なりけり	川内 一浩
谷筋を行ったり来たり鬼やんま	野木 正博
パトカーの後ろについて秋暑し	小堀 恭子
虫のこゑ付箋ふえゆく新句集	西五辻芳子
いにしへの姫も好いたり氷水	斎藤よし子

良寛の書に見惚れみて小鳥来る
蟬時雨七十五年蟬時雨

中村 順次
田中 勝

2020年10月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

木天蓼の花や昼より灯す道	酒井 富子
鉢植のバジルに目あり雨蛙	中嶋 文子
水底に舞ひ立つきらら清水汲む	吉田多々詩
水の輪を崩し合ひをる水馬	南田美恵子
生まるる者逝く者ありて蟻の列	友永基美子
祇園囃子なき宵山や校了す	中島 冬子
退院の帰途にてくぐる茅の輪かな	大野千鶴子
嵯峨野なり定家かづらに出会ひしは	田崎セイ子
荒ぶる世に軒の風鈴鳴りしきる	長瀬 朋孝
手旗振り機関車後走月見草	仁田 浩
達磨寺の落し文ゆゑ拾はずに	真下 章子
芥子ほどな黒目すいすい目高の子	益子 桂子
四つ角を曲がりて涼し蔵の町	森 すゞ子
辻の祠その仏めく梅雨茸	山中ひでの
海越えて届く声あり梅雨の朝	小寫 和
貨物列車どごとと停まる戻り梅雨	齋藤 耐
鳩居堂の香や銀座の秋めきぬ	鴻坂 佳子

緑陰や姿を見せぬ鳥の声	川内 麻美
端居してこころの置き処この辺り	山本 京子
夏萩や道に迫り出す山の岩	石田 祥子
切火して読経始まる土用灸	長浜 利子
梅雨明や窓枠はやも熱を帯び	羽鳥 正子
芋畑へいつしか出来しけもの道	中村 順次
七夕の夜半に雨風つのりけり	城戸崎雅崇
見なれたる山に重たく梅雨の雲	鈴木和香子
風渡る同じ青田に同じ鷺	丹羽 康夫
阿寒湖にウポポの響く夏の夕	宮原亜砂美
炎天に軒の瓦きしみけり	大野 邦夫
雲影が青墨のごと夏の山	小堀 恭子
縁側の夏日や父の指定席	小堀 尚美
夏草やだんだん小さくなる私	前田 鈴子
梅農家あまさず実梅使ひきり	森 幸子
籠持つて帰りはおんぶ蛭狩	山口 容子

鳴く蟬に雲はいよいよ高くなり	林 剛
夏の日や青差し色に装うて	細見 昌代
持ち家に身を縛られてかたつむり	牧田満知子
七夕の願ひ豪雨に流されて	小川 妙子

2020年9月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

長崎の種が大樹に枇杷実る	渋谷 啓子
白虎洞よりの出口の苔茂る	中嶋 文子
崖見えぬ越後の国の植田かな	佐々木 成
風待月今宵寄道せず帰る	中井 昭雄
余り苗あたかも鬼門守るごと	古川 邑秋
子どもより傘より高く蛍飛ぶ	鈴木 春菜
胡瓜揉む緊急事態宣言下	山本 真也
ませ棒の穴の擦れ跡額の花	羽鳥 正子
良薬は苦しと梅を煮詰めけり	森 すゞ子
桑の実や昭和の路地は土のいろ	吉田多々詩
一事とて秘めてはできぬ辣蕪漬	南田美恵子
一燭に爽やぐ指よ伎芸天	栗本 一代
若き日の悪夢忘れじ梅雨出水	荒木 照代
母もとへこの虹の橋渡りたき	田崎セイ子
泣くもんか眼ん球だつて汗をかく	友永基美子
黒南風や牛は牛舎を出たがらず	仁田 浩
マスクなきは遺影のみなり慰霊の日	福地 義雄

串打たぬ鮎の素朴さ網の上	朝田 玲子
左京区の片隅に居る墓の恋	福田 将矢
雨安居やぐぐぐぐぐと背伸びして	富沢 壽勇
遅き日や雲一筋の羽田行	碓氷 芳雄
豌豆伸びろ空に居るとふ巨人まで	中野 悦子
植田一面浮かぶがごとく島田宿	大石 高典
万緑の濃き香り立つ貴船かな	片山 旭星
青梅の痩せて寄り合ふ瓶の中	河村 純子
頼もしき介護の腕が紫蘇をもむ	前田 鈴子
戻り来てもまだ居座りぬはたた神	真下 章子
炎天やみじろぎもせぬ警備員	佐藤 聡
梅雨寒の泣き顔映る窓ガラス	鈴木和香子
蓮の葉の水滴揺るる朝の鐘	宮原亜砂美
梅雨入や毎朝顔を洗ふ猫	吉田 達哉

薔薇咲くや剪らぬと決めて眺めをり	小堀 尚美
新じやがの小さきは婆の煮ころがし	森 幸子
乳せがむ子に父の汗無力なり	佐藤 慎一
街路樹の杏をジャムに街起し	石田 祥子

2020年8月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

どの家も栗の花咲く京丹波	中島 冬子
急ぎ剪る雨のにはほひの白薔薇	栗本 徳子
村の名は長者屋敷よ松の芯	佐々木 成
蓴菜や声に零るる独り言	河村 純子
身をふせて橋くぐる舟花檣	宮澤 淑子
窓際を離れて座る真夜の雷	川内 一浩
独りとて都会の家のハンモック	大石 高典
消毒と言ひ夫の酌む冷し酒	西五辻芳子
たけのこのいのちの重さたづさへて	栗本 一代
使用不可とふ公園の五月晴	大野千鶴子
見栄張つていつも空腹こひのぼり	友永基美子
蜘蛛の囿の揺れて雨粒光りけり	中井 昭雄
豆飯や猟銃の音二三発	真下 章子
緑陰やかくれんぼして忘れられ	川内 麻美
こどもの日庭はテントに占拠され	中嶋 文子
若き部下逝きし五月の来たりけり	古川 邑秋
蜘蛛の囿を払ひ朝一番の山	野木 正博

花えごの香りて白を探る闇	朝田 玲子
新緑の街透き通るにはか雨	碓氷 芳雄
柵越しに触れてみたきよ月見草	富沢 壽勇
お日様に目覚め後るる立夏かな	石原ゆき子
用水へ分水つづく夏の川	羽鳥 正子
薔薇一輪対し大きく息ひとつ	斎藤よし子
籠り居の窓に新樹の迫りくる	南田美恵子
初夏やこずゑ揺らして影揺らし	片山 旭星
トロ箱に尾ひれはみ出し初鯉	佐藤 聡
藤棚や風は花房くぐり抜け	櫛淵かりな
毛繕ふ猫に筧流しかな	長浜 利子
苜蓿いまだ毒消し見つからぬ	堀口 忠男
下仁田の段丘どこも葱坊主	森川恵美子
水鉄砲は竹鉄砲よ幼き日	城戸崎雅崇

菖蒲湯を合戦場と幼たち	鈴木和香子
新幹線の車体の走る代田かな	丹羽 康夫
地形図を読み旅ごち夏立ちぬ	大野 邦夫
花曇り母は小さき寢息立て	小堀 尚美
薔薇を持つ少女はせりふ言ふやうに	山田ミチ子
腰据ゑて太き玉葱引つこ抜く	長瀬 朋孝

2020年7月

当月の水壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

摘みに来よと土手に土筆の立上がる	中島 冬子
坂道の上の我が家へ春の月	鈴木 春菜
春の野や一人の刻を引き延ばす	古川 邑秋
花冷や体温計に耳さとし	中嶋 文子
佐保姫の情けある風遊びたし	河村 純子
揚雲雀やはり眼鏡をかへませう	仁田 浩
青空は若き日のあを花水木	川内 一浩
切通しの小流れ堰くは落椿	宮澤 淑子
山独活のこぼす大地のほひけり	羽鳥 正子
湘南の風の帽子や春夕焼け	川内 麻美
春眠の耳より覚めて夢のなか	渋谷 啓子
蒔絵師の祖父の絵柄や光悦忌	中井 昭雄
鯉のぼり風に本気の見えにけり	木村 静子
水温む世間話をしてゐる間	山本 真也
摘みたての水の匂ひの芹の束	植田 清子
集合地は徒歩にて五分花筵	長浜 利子
干物乾し終はらぬ内に蠅生る	大石 高典

野良猫の跨いで通る名草の芽	友永基美子
野薊を踏まぬやうにと牛動く	川上 和昭
風の道避け南瓜蒔く山の畑	益子 桂子
結多き集落の田や蝻の道	吉田多々詩
新しき土の香まとひ畑を打つ	佐々木 成
春の土窪むところの烏骨鶏	福田 将矢
春の門清めて閉ざす若き僧	林 剛
夕日なかすいすいと初燕	野木 正博
一輛に乗客一人八重桜	益子 桂子
東雲の真白に浮ぶ桜かな	櫛淵かりな
百年の天より降りて山桜	朝田 玲子
英傑の稚き眉目五月雛	中野 梓

足音の水脈の乱るる春の鴨	田辺美千代
座禅草おのれ信ずる方を向き	大野 邦夫
たんぽぽの絮飛びゆけり雲の無礙	西五辻芳子
順番に抜いてくれよと葱坊主	丹羽 康夫
城山と謂ふ裏山の百千鳥	酒井 富子
夕闇や花筏みな接岸す	城戸崎雅崇
小さき手に躑躅の蜜の甘きこと	田中 勝
たんぽぽや往復二里の通学路	森 幸子

2020年6月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

疫病へ関の声あり竜天に	仁田 浩
能役者閑にて候春の月	河村 純子
子規の着たる縞の端切れやあたたかし	木村 静子
蒲公英の絮行く先を風が告げ	川内 一浩
ものの芽のほぐるるにほひ雨近し	中島 冬子
ルワンダの丘いつばいの茶摘かな	大石 高典
權先の光る水面や真菰の芽	益子 桂子
三月や置薬屋の大きな荷	長浜 利子
明日は引く白鳥のこゑ沼にあり	佐々木 成
仲春の雲居の高さありにけり	渋谷 啓子
ことづてをしたき人あり鳥帰る	古川 邑秋
古墳より大和国原春霞	栗本 一代
青年は春寒の書齋を好む	山本 真也
子の家へ出張のごと雛飾る	立石 律子
縄電車通り過ぐるぞ落椿	大野千鶴子
吊橋の向かう紀の国水温む	西村みゑ子
幼少の吾に父の墓お中日	中嶋 文子

春炬燵午後は録面のチャップリン	植田 清子
蝌蚪太る池に抜け穴抜くる水	福田 将矢
跳ねずにはをられぬ春の駒若き	朝田 玲子
息すれば窓くもらする春の雪	川内 麻美
北嶺の雪の別れや電車待つ	齋藤 耐
護摩壇の火勢極まる水送り	小堀 恭子
野遊びや薄暮に五重塔の先	林 剛
山門の脇をかためて紫木蓮	城戸崎雅崇
啓蟄や亀の飼育の箱洗ひ	南田美恵子
登り来て春の匂ひの比叡山	野木 正博

春暁や推しはかりみる震源地	鴻坂 佳子
銅像の矢を射る構へ風光る	真下 章子
祖母の手がほつれ繕ふ雛衣装	鈴木和香子
一日を男寡黙に畑を打つ	田辺美千代
小流れの石につまづく落椿	前田 鈴子
赤道一周四万キロぞつばくらめ	森 幸子
篝火に清流踊る水送り	吉田多々詩
門の札の疫病封じ春の風	西五辻芳子
三月の予定帳より文字の消え	石田 祥子
土筆摘む日暮れて子等の影絵めく	小川 妙子

2020年5月

当月の水壺集・氷室集より尾池葉子抄出

水 筍 集

手焙に鬘や烏帽子や撮影所	中嶋 文子
降る雪や位牌ひしめく家を守り	河村 純子
遠火事やうちは愛宕の火伏札	仁田 浩
雨に濡れイエスも濡れて踏絵板	川内 一浩
お松明打降る火の粉虚空まで	栗本 一代
青みある紅梅の香の昏れてなほ	栗本 徳子
山門へつらつら椿のぼる坂	中島 冬子
床の間に掛け春を待つ貫主の書	植田 清子
春兆す師と仰ぐ人病癒ゆ	加藤かず子
観梅の弁当重し山の道	田崎セイ子
浅春や「売家」と書けど貼り出せず	友永基美子
冴返るとは運休の観覧車	福田 将矢
雀の巢見えず雀のいつもゐる	鴻坂 佳子
アイゼンの爪に探りて踏み返す	野木 正博
中天の月たそがれの春時雨	片山 旭星
臨月の馬モニターに見る朧	朝田 玲子
池の底に泥の道あり水温む	吉田多々詩

頑なに閉ぢし牡蠣より子蟹出て	宮原亜砂美
牡蠣鍋や故郷へ急ぐ道すがら	碓氷 芳雄
春近し水を治めし玉の塚	林 剛
春遠き蛇の眠れる谷の底	小川 妙子
もう少し寝かせてやるか春寒し	三原真紀子
やはらかな子の手のひらや貝の雛	山本 京子
春めくや電車のベルがおつとりと	佐藤 聡
明け方の時を劈く雉かな	羽鳥 正子

夜も更けてまぶしより取る春蚕かな	森川恵美子
屋上につづく公園冬の薔薇	城戸崎雅崇
かき抱く湯たんぽ幼な子のごとく	斎藤よし子
風光る千住の駅の芭蕉像	中村 順次
寒月に薨の光る家路かな	富沢 壽勇
夜咄や胡麻竹柱主役とす	松澤 博子
父逝きし日のごと降り春の雪	大野 邦夫
春光や人なきときの赤信号	小堀 恭子
雨粒をまとひて木々の風光る	田辺美千代
春まけて水筒の白湯飲み難し	齋藤 耐
春興の寄り道多き遊歩かな	長瀬 朋孝
川の面の小鮒を狙ふ鴉かな	田中ミヨ子

2020年4月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

副虹のくつきり見ゆる片時雨	南田美恵子
出来不出来まるく納めて鏡餅	中野 梓
下萌の雨後の湯気上げ土竜塚	羽鳥 正子
山頂に紫雲従へ初日の出	荒木 昭代
いつしかに服薬の増え去年今年	植田 清子
餅搗きや道具揃へて人揃へ	大野千鶴子
冬晴の六甲山頂海光る	加藤かず子
父のみが遺影モノクロ冬座敷	川上 和昭
くもりガラスに臘梅のけふる朝	栗本 一代
大寒の句も厚きまま峽の昏れ	酒井 富子
凍つる夜や万年筆のインクさへ	田崎セイ子
若水をまづ鉄瓶にみたしけり	田中ミヨ子
餅搗の杵の音軽し塀の内	西五辻芳子
福引の八角箱を年の市	仁田 浩
鬼餅も買うて供へる世となりぬ	福地 義雄
戦時下の飛行場跡麦青む	本多 智恵
鐘の音を枕に寄せて初昔	益子 桂子

鏡餅のちの楽しき昼餉どき	村木 道子
仕事始め冷氣満ちたるビルの中	林 剛
木枯や影踏みの子の息はづみ	佐藤 聡
瞬きをする間も積り村の雪	佐々木 成
着膨れやこの楽章のここが好き	福田 将矢

約束を一つ果たして初日記	中嶋 文子
古地図展ひとり見てゐる春隣	羽鳥 正子
大空に舞ふめ組の「め」出初式	田中 勝
内股に歩む鶴鴿初氷	堀口 忠男
薪窯のピザ焼きあがる三日かな	野木 正博
餅箱といふものありき小晦日	朝田 玲子
冬霞我が家は宙に浮く如し	山本 京子
猪鍋のそこに隠れてゐる明日	谷口 文子
がき大将青き蜜柑を好みけり	斎藤よし子
蓮根掘る泥の中へとトラクター	石田 祥子
近づけば壊るる薄さ初氷	前田 鈴子
湯豆腐の煮ゆるを待たず盃重ね	片山 旭星
明けやらぬうち登校す寒稽古	藤本 隆子
些かのご神酒を撒き農始	長瀬 朋孝
快晴の空へ逆立ち出初式	碓氷 芳雄

2020年3月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

僧堂の寂莫として臘八会	栗本 徳子
枯蔓を足踏ん張つて引けば空	中島 冬子
掛取りも死語となりたり年の暮	中井 昭雄
鳥追の太鼓が村の闇ゆする	佐々木 成
落葉ほの甘き匂ひや漱石忌	川内 一浩
金糸魚にふるさと遠し鱗搔く	羽鳥 正子
木の葉散る原爆供養塔の上	宮澤 淑子
野木さんが来いと言つたら小鳥来る	山本 真也
星冴ゆる帰路や余韻のアベマリア	植田 清子
ウガンダの椀に零余子のをさまりぬ	栗本 一代
寒柝の廃止に音のひとつ減る	酒井 富子
ゴスペルの初めはクリスマスソング	立石 律子
夜勤の子帰る時刻や霜踏む音	田中ミヨ子
夢殿や翅ととのへて蝶凍つる	西五辻芳子
猪鍋の湯気の向かうは恋のこと	小寫 和
天に舞ふめ組のしるし出初式	田中 勝
紋柄に見覚えのある鶴来る	堀口 忠男
脱がせたる馬着の湿り冬ぬくし	朝田 玲子
鐘冴ゆや国境描かぬ世界地図	中嶋 文子
暖突にあくびぼはりと冬の蛇	福田 将矢

水涸るや暴れたるあの千曲川	長浜 利子
時雨雲歩み止めては子が眺め	石神 主水
教皇の禱りに冬の雨しとど	鴻坂 佳子
冬晴の汽笛が六甲山昇る	野木 正博
温室に封じて花の香の甘き	南田美恵子
大声に叫びたき日や空つ風	真下 章子
ボンネットに猫の足跡漱石忌	益子 桂子
水害に岩の苔消ゆ冬景色	森川恵美子
山眠る溪谷の水音もなく	佐藤 聡
雲間より朝の富士見ゆ冬支度	池谷 千波
砂防堤の川底高し紅葉散る	丹羽 康夫
夫にも覚えてもらふ年用意	中野 梓
赤紙を語る人減り十二月	山中ひでの
大根干す天文台の賄ひに	石原ゆき子
ナウマン象地底深くに嶺の雪	林 剛
座敷とて鯛炙るに江戸火鉢	山中伊蘭子
小春日や祖父に教はる竹とんぼ	碓氷 芳雄

2020年2月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

近寄ればここも手向けの通草の実	栗本 一代
代々の揺籠戻る障子の間	中嶋 文子
鶉の来て鳴きし大樹を伐られけり	荒木 昭代
冬めきて湖面の反射率低下	古川 邑秋
空也忌や五尺ほどなる円空仏	西村みゑ子
語部の訛やさしき囲炉裏端	植田 清子
買置きのバームクーヘン夜食とす	川内 麻美
親しさに少し距離あり式部の実	田崎セイ子
子規連載の朝刊や柿を食ふ	立石 律子
敷石の貝殻に射す月明り	田中ミヨ子
小夜時雨亡き師の句集読み返し	長瀬 朋孝
周りみな宅地となりし藁ぼつち	長浜 利子
牛突の鍛錬坂や木槿咲く	藤野 孝夫
奥利根の源泉匂ふ時雨かな	真下 章子
裏庭に出て茶の花に出逢ひけり	村木 道子
初冬の石よりぬつと亀の首	森 すゞ子
冬めくや早寝に残る灯の温み	酒井 富子
天窓の光のびやか神無月	益子 桂子

冬浅し小舟行き交ふ波浮港	森川恵美子
秋深し使ひ古りたる住所録	佐藤 聡
島影とひとつにとけて秋の海	城戸崎雅崇
凧の音たててくる村外れ	中村 順次
金比羅の秋や海底探査船	富沢 壽勇
虫のこゑ点ることなき常夜灯	丹羽 康夫
マーチングバンドやメリークリスマス	吉田 達哉
短日や箇条書なる置手紙	森 幸子
柿挽ぐに大空一掴みしたり	山口 容子
堪忍袋切れさう熟柿落ちさうに	山中ひでの
金秋や瀬戸の夕日に島と雲	林 剛
立冬の日差し回り来魚干場	大野千鶴子
幾筋の峰越す雲や神の旅	林 剛
息荒し猟犬光るまなこ持ち	東 俊子
揚子江に動きみせたり浮寝鳥	三原真紀子
大嘗祭御神楽ひびく秋の夜半	西五辻芳子
冬支度木立の影を低くして	細見 昌代
教皇と平和を願ふ冬の夜	田中 勝
来て欲しや南の島へ雪女	福地 義雄

2020年1

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筧 集

田水落す魚は川へ放ちやり	藤本 隆子
秋風に潮の匂ひや漁師めし	栗本 一代
小夜更けて半分づつの栗きんとん	鈴木 春菜
螻蛄の怒りの鎌を構へけり	川内 麻美
姉の名を母思ひ出す良夜かな	立石 律子
山荘を啄木鳥たたく岳樺	佐々木 成
とりあへず和平交渉竈馬	仁田 浩
提灯を門に通りに村の秋	古川 邑秋
月夜見の宮より出でて毒きのこ	西村みゑ子
誰彼にやさしくしたき星月夜	三原真紀子
雨戸閉づる手を休めたり虫の夜	植田 清子
虫の音や三週ぶりのわが寝床	大野千鶴子
谷底の水音目指し落葉踏む	川上 和昭
呼出しブザー押しかけて止め夜長かな	たむら晩秋（故）
台風に空路航路の止まる島	藤野 孝夫
みのこづち数多つけつつ引抜きぬ	村木 道子
せせらぎの音を跳び越え吾亦紅	川内 一浩

サイレンや金木犀の夜気の奥	朝田 玲子
熊笹の枯葉くづれが裾に付き	川竹 美樹
ひとり食ふさんま苦しとつぶやいて	谷口 文子
秋鮭を焼いて弔ふ猫の死に	昌山瑠璃子
横からの富士は影めく後の月	片山 旭山
水槽のまんぼうの浮く月夜かな	鴻坂 佳子
仕出屋の看板古りし秋時雨	石神 主水
ゆきあひの空ふはふはと雪虫来	西五辻芳子
野鶺の杭探しみる田んぼかな	堀口 忠男
かさかさと莢はじかせて種を採る	益子 桂子
展墓なり土盛り直し濁り酒	大石 高典
帰路につく羊の列や秋の雲	城戸崎雅崇
大弓の四方を祓うて秋社かな	丹羽 康夫
卵抱く大蠶螂の威嚇かな	前田 鈴子
どの家も大家族なり柿たわわ	森 幸子
助けなきやと幼ひたすら藪を掘る	山口 容子
大根蒔く畝間に入日落ちにけり	山田ミチ子
拾ふ気のなきに手が伸びくぬぎの実	南田美恵子
種蒔いて三年のちの零余子飯	塚本 郁子
秋刀魚さんま啖いて行く使ひの子	田崎セイ子